

大体二二年分を取め、第十一輯で二十四年五月に至っている。毎輯の分量も満漢両文併わせて大体九百数十頁にのぼるB5版の巨冊であるが、第九輯は丁度千頁に達する。印刷は『故宮文獻』のように朱墨二色刷りではないが、皇帝の硃批、軍機大臣の奉旨墨批、皇帝皇后の喪中の藍批は該当個所に記号でそのことを明示し、満漢合璧摺のものは巻頭の漢文の目録の該当個所の上にはやはり記号を付けて注意している。そして本文中に破損のため文字の不明な個所がある場合は、第三輯以降その個所に「原檔残損」の印を捺すなどさらに工夫がこらされている。

『故宮文獻』と共にその「特刊」の『宮中檔光緒朝奏摺』の巨冊が右に述べたように定期的に着々と刊行されているのは、とかくこのような純学術的な書物の印刷の困難な昨今の状況からみて驚嘆に値すると言わねばならない。光緒朝の分は、この調子で進めば恐らくあと一年内外で完了するであろうが、さらに他の年代のものも同様に刊行して頂きたいものである。それについても折角貴重な史料が公刊されたのであるから、その十分な活用こそ今後研究者に課せられた義務であらう。

R・A・スタン 訳注

『瑜伽行者ドウクパ・クンレー の生涯と歌謡』

中井英基

本書は、ドウクパ・クンレー (Brug-pa kun-legs, 1455～1523) というチベットの宗教詩人の自叙伝を仏訳し、脚注を施したものである。訳者のスタン教授は、フランスにおけるシナ学・チベット学の大家であり、多くの著書を持っておられるが、これらのことは今さら贅言を要しないだろう。

このドウクパ・クンレーという人物は、カギュ派の一支派であるドク派の本山座主を代々継承したギャ氏 (Gya-pa) の一員であった。彼の経歴や活動については、教授の名著『チベットの文化』(山口瑞鳳・定方晟共訳、岩波書店、一九七一年十月)の中に、すでに部分的に紹介されている。すなわち、彼は富裕な本山座主の一員として生まれ、当初は幸福に暮らしていたが、しかし後にギャ氏一族に相継ぎが起きて、父は殺され、家族は離散の憂き目にあったという。彼自

身は、リンブン侯 (Rinshunshō) の召使いとして六年間辛酸をなめたが、長じてのち放浪の旅に出た。以後の彼は、いわゆる「ニヨンバ (Sanyonpa) 瘋狂者の意」として民衆に知られ、親しまれるようになった。

「ニヨンバ」とは、教授の言葉を借れば、「教会に対するその非妥協的な行動により、また逆説的な態度や遍歴生活によって、学者的な著述家達とは区別される」⁽¹⁾「貧しい放浪の瑜伽行者」⁽²⁾である。「彼等は詩、歌、踊りを愛し、しかも、その方面の才能をもっていたことも否定できない。彼等は笑ったり、冗談をいったりすることが好きである。彼等は民衆に交わり、民衆に加担する。従って、彼等は社会の悪弊を、教団や宗派のそれも含めて激しく糾弾⁽³⁾した。十一世紀の有名な詩人ミラレバは、このような「ニヨンバ」の先駆者であった。ドゥック派は、カギユ派の中でもこのミラレバの伝統を最も深く受け継いだ宗派であり、ウ・ニヨン (dBus-smyon) ツァン・ニヨン (gTsan-smyon) ラ・ニヨン (Ra-smyon) など多くの「ニヨンバ」を輩出させてきた。ドゥック・ニヨン (dBrugs-smyon) と呼ばれるドゥックパ・タンレーは、まさにこの伝統の中で生れ、育まれた宗教詩人なのである。

筆者は、かつてドゥック派における本山座主の相統形態を検討したときに、この人物に深い興味を覚えたのであるが、しかし、彼の自叙伝には、通常の伝記とは全く異なり、誕生か

ら歿するまでの、順序の整なつた年代記的な記述がほとんどなく、それに口語や俗語が多く、比喩・諸譚も含まれていて、筆者は読解に非常に苦しんだ経験を持った。一九六八年の夏、東洋文庫でスタン教授にお目にかかったとき、この人物の自伝の翻訳原稿がほぼできあがっていると伺い、その出版を待ち望んでいたが、今こうしてユネスコの補助を得て公開されるに至つた。ここに喜びをもって本書を紹介する次第がある。

二

本書は、はしがき(一一二頁)、序論(三二二七頁)、翻訳について(二九一三六頁)、本文訳注(三七一四二二頁)、附録(仏藏対訳表、梵藏対訳表、術語集、索引)(四三三—四四三頁)などから構成されている。

まず序論では次の諸点が論じられている。第一に、ドゥックパ・タンレーが多くの小話、逸話、洒落のヒーローとしてチベット人にあまねく知られていると述べて、前述したような「ニヨンバ」としての彼の特質や役割を紹介している。そして烈しい教団批判と、ルネッサンス期のラブレリーの如き、糞尿譚的で猥褻な「汚らわしい」性格とによって、彼がチベット人仏教史家に取り上げられず、従って、現在の我々にもその名前がほとんど伝えられなかったが、彼のそのユニーク

な個性と、チベット及びその他の国で見られるある特定のタイプの聖者を代表している点からみて、この人物はチベット文化の理解にとって極めて重要である、と評価している。またこの人物を通して、十五・六世紀のチベット社会の側面を如実に認識することができる、とも述べている。

第二に、チベット仏教の各宗派、とくにドゥク派を概説した上で、ミラレバ以来のDohaの伝統⁽⁵⁾、一見して反モラル、あるいは少なくとも非モラルにみえる「ニョンパ」の行動の教義上の根拠(規律を重視するカダム派の教義と、カギム派のMaha-mudraの教義との融合)、歴代座主職を継承したギヤ氏の系譜と「叔父・甥相続(Chu-dbon)」、「ドゥクパ・クンレーの生存年次の確定、ギヤ氏の系譜上における彼の位置、彼のおいたちや家族・子孫、などのドゥクパ・クンレー自身と彼の周辺について、現時点で資料上判明した限りでの事柄を説いている。

第三に、当時の時代背景として、バグモトウ、リンブンなど諸勢力の興亡を概観しながら、それらとの関係におけるドゥク派教団の消長を簡単に跡づけている。またとくにドゥクパ・クンレーがバグモトウ王朝に忠実であったが、一方で常に諸勢力の対立、抗争を調停して和解させるよう努めたことにも触れている。

第四に、先に述べた教義の問題を別の角度から取り上げて

ている。すなわち、ニンマ派の中に継承されていた中国仏教の禪の教理が、ガンポバ(sGam-po-pa)の系統であるタクポ・カギム(Dags-po bKah-brgyud)にも同様に脈々として伝えられて、ドゥクパ・クンレー自身の教義体系の構成要因となっていたことを指摘して、この点の研究の意義を強調している。

最後に、第五として版本の問題を扱っている。ドゥクパ・クンレーの「全書(sGuh-bum)」は全四巻であるが、第一巻(Ka)が本書に仏訳された自叙伝の部分で、一六九葉の長さを持つ。この自伝の部分には異本が多い(とくにブータン)として、その一部を紹介している。第二巻(Kha)は八葉で、その内容は自伝の中に挿入されなかった逸話・語録集である。七四葉の第三巻(Ga)には、祈禱、頌歌、手紙、会話文、奇聞類などが含まれている。最後の第四巻(De)は二九葉の短かい語録集である。しかし、第一巻のコロフォンによれば、編集者はドゥクパ・クンレー自身の記録や様々な文献類を重複しないように集大成して「自叙伝」を編纂した、とあるので、各々の記録すべてが間違いなく本人のものであるのか、この点なお明確な確証は得られないが、現在ではそのまま受け入れざるをえないとしている。そしてこの全書は、ドゥクパ・クンレーの死の約半世紀後に、彼自身の化身の一人によって出版されたものであろう、と推定してい

る。

以上が序論の要点である。続いて、翻訳上の注意点、とくに教授の「文献学的」翻訳の方針が述べられているが、ここには普段チベット語の術語をサンスクリットや漢字に機械的、無意識的に置き換えている我々に厳しく反省をせまるものが含まれている。附録の各種対照表や術語集は、この方針に即して作製されたもので、とくに教義関係の記述の理解には便利である。

そして、仏訳の本文が約四百頁にわたって展開されている。この自叙伝の内容は、前述したように普通のクロノロジカルなものではない。また難解な部分を多く含んでいるが、教授はこれを見事に翻訳し、丁寧な脚注をつけて、この作品に接することを極めて容易にしてくれている。そこには、「ニヨンパ」独得の、自分の生いたちや修業の過程をも含めた様々な事柄、放浪の旅に伴なう逸話・奇聞・小話、信仰や聖者への賛歌とそれとうらはらの教団への諷刺や批判、教義の解説や自説の展開、喜びあるいは悲しみの込められた歌と詩、などが、時に比喻や諸譚も混ぜられながら、第一人称の形で繰り広げられていて、何時の間にか、我々を十六世紀のチベット社会に誘い込んで行く。またその内容は、これまであまり知られていなかったチベットの社会や文化のある諸側面を浮き彫りして、我々の知見や認識をより豊富にしてくれる。

もし教授の前者『チベットの文化』が、教授独自のユニークな視点からチベット文化・社会一般を描きたいわば「総論」であるとすれば、この自伝の訳注は、「ニヨンパ」の眼を通したチベット像という「各論」に相当するだろう。また教授に従って、チベット人の一般的性格を代表する「理念型」として、「一つは真面目で、厳格な聖者、一つはよく笑う聖者。前者は思想家、学者、道徳家で、後者は神秘家であり、魔術師である。」⁽⁶⁾という二つの類型を設定するならば、従来のチベット学は前者のタイプの究明に集中するきらいがあったと言えるだろう。ドゥク派の中には様々なタイプの学者や聖人がいたが、イタリアのG・トゥッチ教授はその中の一人、十六世紀の代表的碩学パ・マ・カルポ (Pad-ma dkar-po) を好んで取り上げて、それよりわずか一世代前のドゥクパ・クンレーヤ、その他の「ニヨンパ」の存在にほとんど全く触れてこなかった。トゥッチ教授のかかる姿勢の中に学界の傾向が象徴的に現われているように思われる。これに対して、スタン教授は、むしろこれまで不当に軽視されてきた後者のタイプの発掘と紹介に意を傾むけられてきた感があるのである。このドゥクパ・クンレーヤの訳注は、まさにこの方向に即した教授の一連の諸研究の一環であり、この分野に関して我々を大いに啓発してくれる貴重な力作である、と位置づけられるだろう。

三

最後に、本書に対する若干の点を指摘したい。といつても、訳注の本文からは、筆者はただ教えられる一方であった。従つてここでは、ドゥック派史解明への関心から、序論に述べられたことに対して、幾つかの点を取り上げたい。第一に二つの誤植がある。一つは、ウ・リュミンの生年について、九頁に一四五八年とあり、また二三頁に一四五七年とあるが、これは前者が正しい。もう一つは、ハマ・カルポの生年についてである。一二頁に一五二六年とあるが、これは「ドゥック派本山座主の系譜」の一六、四一八頁にあるように、その翌年の一五二七年とすべきである。この点について、かつてマツチ教授が、*Tibetan Painted Scrolls*, Roma, 1949, pp. 125, 162 をあげて、一五二六年の誕生とした。これが誤植であるかは誤記であったのか、全く不明であるが、L・チャンマ (Lokesh Chandra) 氏が、*Materials for a History of Tibetan Literature*, Part I, New Delhi, 1963, p. 25 でこれをそのまま踏襲し、筆者自身もこれに盲従したことがあった。しかし最近になってマツチ教授は、*Tibet, Land of Snow*, Roma, 1967, p. 198 で、一五二七年に改めた。自己批判も含めて、この点指摘しておきたい。

第二は、本書の八頁に掲げられたドゥック派の分派の問題で

ある。ここでは、有名な「上・中・下」(Tod, sMad, Bar)の三分派の外に、*ニ・ラワ・キェンツェン・ルサンポ* (ñBar/ñBar-ra-ba rGyal-mshan dpal bzun-po, 1310~1391) の系統と、「南のドゥック派 (Lho-brug)」の二分派を加えて、合計五分派としてゐるが、これは疑問である。まず、*ニ・ラワ*の系統は、*Deb-ther shon-po*, ff. 121b, 127ab, 129a, *Padma dkar-poñ chos-ñbyun*, sprints-thän ed., f. 181a, *Grub-mthah gel-kyi me-lon*, Vol. Na, f. 15b などによれば、「上」の「ドゥック派」に所屬する、とあるからである。また「南のドゥック派」とは、一六一六年にツマン王との対立から南方のプータンに亡命した第十八代座主ガワン・ナムキェル (Nag-dban rnam-rgyal, 1594~1651) の系統であるが、第十八代と袂を分かつて、チベットに残ったバクサム・ワンポ (ンマ・カルポの化身、dPag-bsam dban-po, 1593~1641) のグループは、「北のドゥック派 (Byan-brug)」と呼ばれてゐる。しかし、この南北両派の成立は、先の「上・中・下」の三分派の場合とは、時代も性格も異なり、同列には扱えなうのではなからうか。むしろ、「南のドゥック派」が南北に分裂したとみなすべきではなからうか。従つて、結論としては、「ドゥック派の分派は、従来通り「上・中・下」の三派のみで十分であると思われ

る。第三は、一〇頁と一一頁との間に挿入された「ドゥック派本

山座主の系譜」(以下、単に「系譜」と略称する。)に関する疑点四つである。第一点は、ギヤ氏におけるオン・タツ (dBon-sag) の血縁関係上の位置である。この「系譜」では、彼はリンチェンパル (Rin-chen-dpal) の子で、第四代座主ニマ・センダ (Ni-ma sen-ge) の兄弟とされているが、Padma dkar-pohi chos-hbyun, f. 183b には、彼は第二代オンニマ・タルマ・センダ (dBon-ras Dar-ma sen-ge) の弟であって、リンチェンパルとは従兄弟同志となる。従って、この点「系譜」上の彼の位置を改めなければならない。第二点は、第五代座主センダ・リンチェン (Sen-ge rin-chen) の兄センダ・マヘーラン (Sen-ge ges-rab) の生存年代である。彼は、ウギキムパ (U-rgyan-pa) の要請で、本山座主を継がず、「上のドクク派」の法灯を継承した人物である。「系譜」では、彼の生存が一二三〇年頃から一二七〇年頃となっている。それは、Padma dkar-pohi Chos-hbyun にたどらずかに彼が四十一歳で示寂した、としか記述されていないからである。この点、筆者も明らかでないが、『ラルン寺本山座主伝記集』(ラルン・テンラフ、Rva-lun gdan-rabs) 中の第五代座主伝によると、この人物の歿年は、サキヤ派のバクツ (bPlags-pa) の第二回目のチベット帰国 (一二七六年) と、第四代座主の歿年 (一二八七年) との間の期間のことで、伝記の記述の前後関係から、かつて筆者は一二七八年頃と推定した。も

とより、これは明確な根拠が発見されるまでの暫定的な処置にしかすぎない。けれども、一応彼の生存年代は、この「系譜」上の記載よりも六、七年後にすらすべきであると思われる。第三点は、第六代座主センダ・ギェルポ (Sen-ge rgyal-po) の歿年についてである。「系譜」では、一三三五年あるは一三三六年とされている。Padma dkar-pohi Chos-hbyun, f. 184b, 185a には年次の明記がなく、ただ彼が二十五歳で座主に就位し、三十八歳で歿したとあるのみである。従って、座主位継承を父の歿年 (一三三三年) とすれば、歿年は一三三六年となる。しかし、Deb-ther shon-po, Vol. Na, f. 118b, mkhas-pahi dgañ-ston, p. 419, Rehu-mig, pp. 30, 33, 34 などの諸資料には、三十七歳の一三三五年とあるのでも、先の記述のように保留されたのであろう。しかしながら、資料上最も価値の高い『ラルン・テンラフ』中の第六代座主伝には、この点、丙寅の年 (一三三六年) の十月十三日に三十八歳で示寂した、と明記されているので、歿年はこのように決定されよう。最後に、第四点は、第十代座主イェシエー・リンチェン (Ye-ces rin-chen) の歿年の問題である。「系譜」では、一四一五年と記されているが、しかし、これは誤植であらうか。Padma dkar-pohi Chos-hbyun には、関連の年次が何一つ述べられていないが、Deb-ther shon-po などの諸資料、また『ラルン・テンラフ』中の第十代座主伝にも、

歿年は五十歳の二四一三年と明記されてゐる。(2)

以上、歴史的な観点から若干の点を述べて、『チンマッタの文化』に続く教授の大著についての十分な紹介を終えたい。

註

- (1) 前掲邦訳『チンマッタの文化』、三二四頁。
- (2) 同右、一五七頁。
- (3) 同右、一五七頁。
- (4) 「マツク派本山座主の相統形態について」(口頭発表)、日本西蔵学会・第十六回大会(於、京都大学文学部内陸マシア研究所)、一九六八年十一月十六日。拙稿「チンマッタにおける仏教々団主の相統形態——マツク派 (in Brug-pa) におけるク・オン (Khu-dbon) 相統をめぐって——」、『「橋論叢」第六三巻第六号、一九七〇年五月、八二—一〇一頁。
- (5) この点に関して、最近興味深い次の研究書が出版された。H. V. Guenther, tr. & annotated, *The Royal Song of Saraha: A study in the History of Buddhist Thought*, Seattle & London, 1969, vii+214 pp.
- (6) 前掲邦訳『チンマッタの文化』、三三三頁。
- (7) 西蔵学会大会の席上で、配布した資料「マツク派本山座主の系譜」。

批評と紹介 石沢

(8) E. G. Smith, "Foreword", I, Chandra, ed. *Tibetan Chronicle of Padma-dkar-po*, New Delhi, 1968, p. 3, foot-note 1

(9) 前掲拙稿、八四頁、八六頁の註(8)を参照されたい。

(10) 以上の四点については、前掲拙稿の九二頁掲載の第一表、九八・九九頁の註(5)及び第二表を参照されたい。

(一九七四・二・十一)
(三・十一) 補訂

(Vie et Chants de 'Brug-pa Kun-legs le yogin, traduit du Tibétain et annoté par R. A. Stein, 443 pp., Paris, 1972.)

S・サンイ

『古代カンボジアの政治制度と

行政組織』

(六世紀から一三世紀)

石沢良昭

[I]

古代カンボジア史は、碑文の解説により徐々に明らかにな

第五十六巻 六一